

教育界の轉向と保育

大阪、若葉幼稚園長 竹中良治 郎

智育偏重打破は日本精神の強調と共に刻下の流行語の如き感があつて少しく教育に携る者の殆ど異口同音に叫びて居る所である。其結果大楠公の銅像を校庭に建設したり神社の參拜を奨励したりしてゐる。誠に結構な事で智育萬能教育から轉向して精神教育に國民の教育的基礎を求めつゝあるのは國家百年の計として吾人は雙手を舉げて贊意を表し度い。しかし單にかゝる種の企てのみではたして智育偏重の弊が打破され日本精神が真心に植付け得るであらうか、一體智育偏重打破、日本精神高調なきが今更ながら新しい問題として叫ぶものが不思議な位で少くも日清戰爭を終つた頃の我が教育界にはかうした運動があり人格主義の主張が存してゐた。尙ほ誠に畏れ多い事だが教育勅語の御主意もこゝにあるのではないか、又近くは幼稚園令設定當時の文相の訓令にも設備なるも保育當事者の人格に重き

を置く意味の人格主義が現れてゐる。然るに日本の教育家は國に精神主義を唱へつゝ實行して來た所には智育に全力を傾倒し尙ほ足らぬ云ふ様な感があつた。其結果一藝一技には秀でゝゐるが意志も情操も乏しい人間が出來上る。現代の如く高位高官にして社會の木鐸さなるべき士が縲纆の辱を受けたり、所謂高等教育を受けた婦人がさもすれば人間の榨も糟の如く水氣のない人間味皆無の人物を輩出するに至つた。かうした社會に危険思想や姪祠邪教の横行するは當然云ねばならない。だが一面から考へるに我が國の教育がかゝる缺陷を辿り來た云ふ事も亦寛容すべき理由がある云ねばなるまい。何となれば我が國は明治開國以來其物質文化に於て歐米諸國より遙かに遅れてゐた。これが進歩完成は國家自衛上必須の事で一日も等閑に付せ得ぬ重大な問題であつた。だから吾人の先輩は此の遅れてゐる

る日本を歐米並みの水準に引き上げんことを不斷の努力をなして來た。其の爲め歐米の精神文化よりも手取早く目に付き直ちに役立つ物質文化を多く歓迎してこれに滿身の力を致したのであつた。その努力は酬ひられ日清日露の戦勝となり更に現代の躍進を世界に現出せしめた。

故に此方面から云へば智育偏重もあながち頭から排斥し去るべきものではなく否な却て感謝すべき點がある。一體國家も個人同様さうく一時に兩事を完全に受け入るゝのは困難である。それも坦々たる行路を進むならいざ知らず過去半世紀の日本の如く諸事萬端不備にして、しかも列強の重壓もすれば我が頭上に至らんことを際し、これに對應するには勢かうした偏重な教育になり易いのである。だから前にも云ふた様に教育勅語は暗誦しても其御主意の實行は之れをなさんともせず神社に參拜しても日本固有の美しい禮節から離れたりしてゐる。要するに見える物質的教育に急に見えぬ精神的教育は口にしつゝ實行が出来なかつたから形式化して仕舞たのである。若し此の方面から現代日本の教育を一語にして云へば形式化教育と稱する

も過言ではない。一切が形式である、燦爛として美しいがそれは魂のない外形的な教育である。衣の教育であつて命の教育ではない。しかし今や日本は所謂草創とも云ふべき域を脱し守成又は進出の時代に到達した。故にいつ迄でも過去の教育法に甘すべきではなく何等から轉向を要求する。

京都や奈良の博物館には名匠の手になつた多數の國寶級の古佛像が群立してゐる。だが其等に對して何人も合掌したり禮拜する者はない。しかし例へば凡庸な名もない佛師の作つた佛像でも寺院に安置されてあれば多くの歸依者がある。否な寺院でなくとも路傍の粗末な石神さへ合掌される。要するに前者は美の對照の一美術品に過ぎぬが後者は生命の對照たる超物質的なものとして敬せらるゝからである。されば美しい形式も或場合には必要だが更に求むるものは偉大な生命である。大楠公銅像の建設、神社の參禮其他それに類した事は誠に結構であるが若し徒らに形式に走り其精神をつかめなかつたら博物館の古佛像に等しいものである。されば色々な企てよりも根本的でありかつ必要なものは教師の人格で、教師が強い正しい明るい生命を把持する

ここである。かうした生命の力があるならば兒童の精神は自から陶冶さる事は必然である。

顧みて現代の保育は如何、何等か一方のみに偏重はしてゐないであらうか。其多くが形式化してはゐるまいか。吾人は常に主張するが如く幼稚園に於ての手技も遊戲も談話も觀察も皆な保育達成の手段であり経程に過ぎない。其自體が決して窮極の目的ではない。かうしたものを通して幼兒の智情意を圓滿に平等に發達せしめ生命を充實し生活を豊富になさんとするにある。然るにこもすれば遊戲や手技に留り其等による保育を云ふことを忘れ、徒らに情的に或は智的に偏重はしてゐるまいか。又一體さんな幼稚園でも歴史あり方針あり主義がある筈だ。保育はかうしたものの上に築かれる従つて遊戲も手技も其れから割り出されるので、いかに個性を重んずるに雖此の條件は無視する譯に行かぬ。然るに現下の手技に例を取つてみれば、保姆には手数が掛らず面倒でなくつてよいかも知らぬが、組立てるばかりの

商品化した手技材料を購入し以て手技を濟ませてゐるものが多い。それは出來上りは美しからうが保姆の魂が入つてゐないし園の生命も現れてゐない。園の特質主張方針に基づき頭を捻つて工夫し一枚々々缺を入れて準備してこそ保姆の魂を入つてゐるのである。無論作品は外觀上拙劣かも知れないが其中には生命があり生きてゐる。恰も印刷した繪畫を肉筆のそれとの差がある。さうした作品を通じて保姆の魂を幼兒の魂が結ばれ幼ない魂が健全に育つて行く、そこに、外觀のみ美しい佛像でなくして歸依者のある魂を持つ佛が出来る。形式でなくして潑瀾たる生命が見出される。

偏重より普遍へ、形式より生命へ、これが現代保育の轉向すべき道程ではあるまいか、しかもこれは決して新しい事ではなく常に唱道されつゝ單に行ひ得なかつた所である。故に本年度こそはこの方向に勇往邁進せねばならない。